

「実践報告」

通史的視点による長崎方言をとり入れた郷土愛と国語力を育む 中学校国語授業の新規的研究

前田桂子・平瀬正賢(長崎大学教育学部)

北村由紀・山田喜彦・川渕正昭・山中典希(附属中学校)

はじめに

長崎は江戸時代にポルトガル人を受け入れて以来、オランダ、中国などとの関係の深い土地として独自の歴史と文化を発展させてきた。その影響で、近世以来豊富な記録類が残り、バンコ、キビショ、シッポクなどの語が外来文化とともに入ってきて、地域の方言になったことが確認できる。また、「食ぶる(二段活用)」、「ごたる(「如し」から)」は古い中央語が断片的に残ったものであると言われる。つまり、方言を学ぶことは歴史を学ぶことにつながる。そこで平成28年4月に、中学生を対象として、方言学習を通じて郷土愛を育み、郷土の歴史と古典学習に繋げることを目標にした教材開発研究のプロジェクトを立ち上げた。

方言学習は、上記のとおり歴史文化や古典学習において有益であり、学習指導要領の解説でも重視されているにもかかわらず、地元方言教材の問題で授業では扱いにくいという面があった。しかし、方言研究者と国語科教育の専門家、中学校教諭の連携が可能な教育学部の特性を生かし、長崎大学教育学部附属中学校の協力を得て本研究を行うこととした。現在、いくつかの県で、小学校を中心に方言教材(カルタ、劇など)の開発が進められているが、長崎は近世以降の外来文化の影響や古典文法学習に繋がるという方言の特徴を考慮すると、中学校での授業がより効果が期待できると考えた。具体的取り組みは以下の通りである。

- ① 方言の使用実態を把握するために、成人および中学生(附属中学校)の方言調査し、方言の推移を把握する。
- ② 長崎方言の歴史を精査するために、図書館にて郷土誌などの方言記述から、方言と意識された語彙を集める。
- ③ 動詞の活用型や、形容詞・形容動詞、助詞などで古語を残す方言を挙げ、古典文法学習に繋げる。
- ④ 生徒の調べ学習に資するため、方言書や方言で書かれた文芸作品を附属中学校図書館に配置する。
- ⑤ 11月に附属中学校で授業を実践した後、生徒の調べと成果を発表させる。
- ⑥ 授業の反応を踏まえ、長崎方言学習教材の開発を行う。

1. 長崎方言の実態調査

授業に先立って、方言使用実態を把握するために中学生への方言調査を行った。

調査項目は語彙、動詞や形容詞活用形で独特のもの、共通語と同じ形をしていながら異なる意味で使用されるもの、音韻的音訛のあるものなどをランダムに配置したものである。選定に際して『長崎県のことば』や『長崎県方言辞典』などの各種の方言辞典を参照したが、報告者が7月に長崎大学の国語学の授業で予備調査をした結果を踏まえ、使用頻度の高いものから低いものを抜粋した。具体的には以下の通りである。()内は共通語訳である。

1-1 語彙(俚言)

<名詞など>

アイナカ(中間) アマメ(ごきぶり) オエン(縁側) ウチンガタ(我が家) キンガン(近視) クチナワ(蛇) クラスミ(暗がり) グルリ(周り) ス(穴 例:ハナンス(鼻の穴)) ズッキャンキャン(肩車) ズンダレ(だらしないこと) チンジュ(縮毛) チンチルマイ(てんてこまい) ツ(かさぶた) デボチン(おでこ) テマゼ(手遊び) トージン(凧) ドワッシェン(落花生) ドンク(蛙) バンコ(長いす) ヒラクチ(まむし) フーケモン(馬鹿者) フセ(継当て) ヘンブ(とんぼ) ミミゴ(耳垢) モモド(太もも) ヨマ(ひも) イッコン(一尾)

<動詞>

アエル(落ちる) アカル(晴れる) アセガル(焦る) イッチョク(放っておく) エークラウ(酔っ払う) オッチャケル(落ちる) オメク(叫ぶ) オモヤイ(共有) オユル(生える) オラブ(叫ぶ) カゴム(しゃがむ) カズム(嗅ぐ) カセイスル(手伝う) カッチェル(仲間に入れる) ガマダス(頑張る) カラウ(背負う) キバル(頑張る) グゼル(だだをこねる) クビル(縛る) クラスル(殴る) サバク(髪をとかす) サルク(歩き回る) シカブル(おもらしをする) スケル(鍋などの下に敷く) ズル(体をずらす) セク(閉める) ゴロビク(引きずる) タマガル(驚く) ダマクラカス(だます) ドッカイスル(満腹になる) ネズム(つねる) ネマル(ご飯などが傷む) バチカブル(バチが当たる) ハラカク(腹を立てる) ビッシャグ(潰す) ヒットヅル(飛び出る) ホガス(穴を空ける)

<形容詞>

エスカ(怖い) オーチャッカ(横着だ) ゲサッカ(下品だ) コスカ(ずるい) コチョバイカ(くすぐったい) サビナカ(塩味がうすい) スカン(嫌だ) セカラシカ(うるさい) チャツチャクチャラ(めちやくちや) テレンパレン(いいかげん) ヌッカ(暑い) ミシカカ(短い) ミタンナカ(みっともない) ヤーラシカ(かわいらしい) ヤグラシカ(うるさい) ヤゼカ(うるさい) ヤゼラシカ(うるさい) ヨソワシカ(汚い)

ダンジャナカ（それどころじゃない）

<副詞、接続詞、接尾辞>

コギャン（こんなに） ゴットイ（いつも） ～シコ（～だけ） ナシテ（なぜ） ニキ（～のあたり） バッテン（しかし） ヒョカット（不意に） マッポシ（正面から）

1-2 文法的表現

文法形式は以下のものである。方言特有のバイ、タイ、ゴタルの他、形容詞カ語尾や二段活用動詞の例、他動詞から発した自動詞「干さる」や「止まる」、主格の助詞「の」などである。

～ゲナ（～らしい） ～ケン（～だから） ～タイ（～だよ） ～バイ（～だよ） ～バシスルゴト（～ででもあるかのように） アマカ（甘い） イルル（入れる） ガラルル（ッ）（叱られる） ゴタル（～のようだ） コユカ（濃い） スッパカ（酸い） タル（足りる） ヌル（寝る） ノウダ（飲んだ） ハワク（掃く） ヒンノム（飲む） ホサツトル（干してある） メノイタカ（目が痛い） ヤマル（中止する、閉店する）

1-3 用法的方言

ここでの例は、共通語と同形でありながら別の意味で使用されるものである。

ツバ（唇） ナオス（しまう） フム（履く） キツカ（疲れたの意味）
クル（行く ex. 「今から来るけん」）

1-4 音韻的方言

長崎方言ではりがイと発音されたり、語末の撥音化が見られたり、母音 o と u の交代現象がみられる。調査では、以下の例を挙げた。

バッカイ（～ばかり） イッチョン（少しも） オイ（俺） オゴル（叱る）
カイモン（買い物） カンゲ（毛髪） カヤス（かえす） コイ（これ）
シャー（おかず） タキモン（薪） ダゴ（団子） テノゴイ（手拭い）
トッペン（頂上） トンコブ（たんこぶ） ナキベス（泣きべそ）

1-5 アンケート方法と集計結果

アンケート調査の対象は長崎大学附属中学校 2 年生 3 クラス、合計 107 名の男女である。

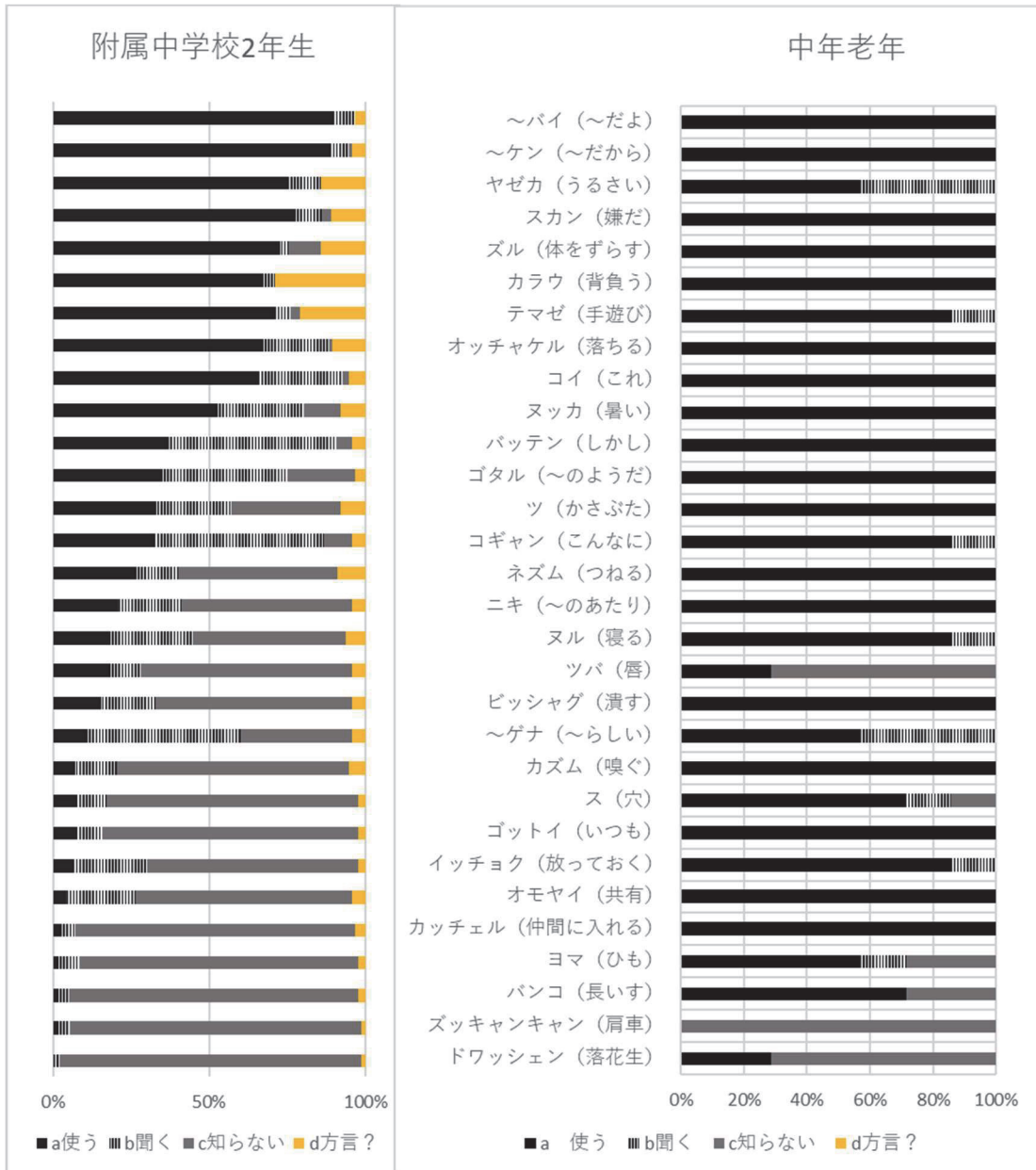
質問項目は上記の 137 語で、質問用紙には対象語をカタカナで示し、（ ）に意味を付記した。それぞれ、

a 使う b 聞いたことがある c 知らない d 方言とは思わなかった
の中から該当するものを複数回答で選んでもらった。配列は品詞などの分類をあ

えてせずに、50音順に並べた。

以下は調査結果の一部をグラフ化したものである。なお、世代間差を見るために、40代2名、70代4名、80代1名に同様の調査をした^(注1)。中学生と中高年の結果を並べて示す。

グラフから、これらの方言語彙調査項目は、中高年層においては認知度が高く、特別な語ではないことが分かる。それが13、4歳の若年層では～バイ、～タイ、ヤゼカ、スカン、カラウなどの基本語彙を除いて、ほぼ衰退の一途を辿っている。



バンコ、ズッキャンキャン、ドワッシェンなど、オランダ語や中国語、擬声語から発した特殊な方言形は言うに及ばず、北部九州に広く分布するバツテンにあっても、使用すると回答した中学生は3割台であった。

この結果から方言の衰退は著しく、方言の伝承が危うい状況が明らかとなった。

そこで、中学生が方言に興味を持つための授業内容を検討した。

2. 附属中学校での方言の授業計画

実際の授業の内容と担当者は以下の通りである。

授業① 方言概説、長崎方言の例 1h 【担当：北村(2-1, 2-2)前田(2-3, 2-4)】

授業② 各自調べ学習 2h 【担当：北村(2-1, 2-2, 2-3, 2-4)】

授業③ グループ内・代表者発表、文法事項説明 1h
【担当：北村(2-1, 2-2)前田(2-3, 2-4)】

授業④ 総括 学習を終えた感想 2h 【担当：北村(2-1, 2-2, 2-3, 2-4)】

2-1 授業①の内容

本授業のタイトルを「もっと知りたい！長崎方言」とし、方言に関心を持たせることを目標とした。授業では、まず、方言のパターンを整理して説明し、方言とは地方で語り継がれた言葉であるが、中には中央から伝わって残った語がたくさんあることを、次の長崎方言の例を示しながら伝えた。

- ・古い中央語が残ったもの…くちなわ（へび）、おろいか（粗末）
- ・中央語と同じ語形で違う意味の語…なおす（しまう） きつい（疲れた）
- ・音が訛っただけのもの…おい（俺）、かいもん（買い物）
- ・気づかない方言…リバテープ、回転焼き、模造紙

また、京都を中心に水の波紋が広がるように都から離れば離れるほど古い語形が残る、という柳田国男の方言圏論の考え方を紹介した。

次に長崎方言を探させるクイズとして、会話文を二人の生徒に読んでもらい、それぞれ指摘を促した。その上で「方言」とは独特の語彙だけではなく、以下のような事項も含むことを伝えた。

1 発音のなまり(アクセント含む)

ex. シェカラシカ～、ウーカゼ、サザイなど。

2 単語の形、意味

3 動詞や形容詞の変化形(活用形)

次に、古典との関わりを説明するために、右のような古典中央語につながりを持つ長崎地方特有の方言形を例に、解説をした(右の画像は授業で用いたPPT

クイズ 長崎弁はどこかな?

▶ 夫1: あいは、どげえ、いったとやろかい?
▶ 妻1: あいって、なんね?
▶ 夫2: あいさ。ようみえんときに、おいのつかう、ほら、あいたい。いつもは棚の上のすつとばってん、きゅうはなかがたつとさ。
▶ 妻2: そいけん、何のことば言いよつと?まさか、あんたが頭ん上にのせとるものことね?
▶ 夫3: えっ?あいた、しもた。わ～、はずかしさ～。

...音のなまり ...語形 ...活用

1 中央語から来た方言

ばってん ←中世語「ばとても」から
えすか ←中世語「えずい」の残存
いつちよく←「打ち置く」から
うーばんぎや←「大番外」のなまり
つ ←中世語「トウ(頭)」から
నికి ←近世語「ねき(そば)」の残存

2 外来文化から来た方言

交易によって入ってきた外来語の例

ポーブラ(abobora)葡 ...かぼちゃ

バンコ(banco)葡 ...長いす

バッテラ(bateira)葡

...小舟または鯖寿司)

ドワッシェン(落花生) ...落花生

である)。逆接の接続詞「ばってん」、形容詞「怖い」、傷のかさぶたを意味する「つ」、辺りを意味する「にき」はそれぞれ中世、近世の中央語にルーツを求めることができる。また、「いっちょく」「うーばんぎゃー」はそれぞれの中央語の音訛である。さらに、外来文化から来た方言として以下を例に、清やポルトガルとの交流で入った近世長崎の語が現在、長崎方言となった例を示した。ポーブラ、バンコ、バッテラはそれぞれポルトガル語由来の外来語であると同時に他地方には浸透しなかったもの、ドワッシェンは「落花生」の中国語音で、これも他地域では「ラッカセイ」が定着した一方で、長崎にはこの形が使用されることになったものである。

また、おくんちで見られる以下の方言の例を挙げ、それぞれ近世の中国語の読み方に由来することを紹介した。

チャアペア(招宝)、ヤーハー(迓福)、ヨーイヤ、サー(弥華)

精霊流しに残る方言として「ずっきゃんきゃん(肩車)」「もやいぶね(共同で出す船)」というものがある。「もやう」とは二艘の船を結びつけるという意味では共通語として存在するが、精霊流しの船の場合、一艘の船を複数人で共有することを意味する。「おもやい」という語は、長崎方言では一つの物を皆で共有するという意味があることも述べた。

授業①の目的は、方言に関する知識を深め、自ら知りたいという姿勢を持たせることである。授業②には各自の興味に沿って目標を設定し、方言に関するレポートを作成する時間にしたので、授業①の終了間際に調べ学習の方針を伝え、テーマの例を紹介した。

- ・体の部分を表す方言
- ・方言の世代差
- ・「乗する」「入るる」など、方言の動詞を探す
- ・「痛か」「うまか」などの用例を調べる。
- ・ハタ(凧)の語源について
- ・お隣の県の言葉と長崎弁の違いについて
- ・方言を使った商品や看板を探す。

2-2 授業②の内容

授業②は条件に沿ってレポートを作成した。条件はⅠテーマ、Ⅱ選んだ理由、Ⅲ調査の方法、Ⅳ調査結果、Ⅴ考察の5つである。

テーマは各自の関心を持ったことを設定し、附属中学校図書室に設置した参考

資料^(注2)などを使い、各自のテーマで調査をした。また、家族への聞き取り調査などは授業時間以外で調査をし、レポートをまとめた。

2-3 授業③の内容

3 時間目の前半は、生徒の調査結果を 4 人グループで相互に発表しあった後、クラス代表者 1 名が全員の前で発表し、質疑をするというスタイルをとった。

発表内容は、「近隣地域と長崎弁との違い」「使用後の世代間差について」「圏分布を検証する」「他地域に通じない長崎弁について」などがあつた。全体的に自分の方言が通じなかった驚きをテーマにしたものが目立ち、実感に基づいた調査になったのではないかと考えている。

本時の後半は、今後学習する古典文法と長崎方言がいかに深い関係にあるか

という点について実例を示しながら説明した。古典と方言を対照する際、「枕草子」「竹取物語」の中から、すでに附属中学で学習済みである箇所を抜粋した。中学生は知っているフレーズであつたためか、よく理解していた。

方言に生き残ったことば 1

よう見えん。おもしろうなか。
秋は夕暮れ。夕日の差して山の端いと近うなりたるに (枕草子) **ウ音便**

先生の来なつた。
鳥の寝どころへ行くとて… (枕草子) **助詞ノ**

何のことば言いよつと?
名をばさぬきの造となむひける。(竹取物語) **ヲバ** **助詞ハ**

方言に生き残ったことば 2

「好かん」「知らん」
わごりよはまだ行かぬか(狂言) **助動詞ン**

「どう?」「うん、良かごたつ。」
ただいまのごとく、わっさりわっさと(狂言) **助動詞ゴトアル**

「だめばい」「よかたい」
これは内でござるわいの (狂言) **終助詞バイ、タイ**

方言に生き残ったことば 3

「荷物ば車に入るっけん、ちょっと待つて」

| 語幹 | -ない | -て | - | -時 | -ば | ! | | |
|----|-----|----|----|----|----|----|-------|-----|
| 入 | れ | れ | るる | るる | るれ | れる | 長崎弁 | 長崎弁 |
| | れ | れ | れる | れる | れれ | れる | 現代共通語 | 共通語 |

「食べん」「見えん」「寝(ぬ)ん」など、否定の言い方が-eになる動詞。
 食ぶる、見ゆる、ぬる… 古典では、この形を下二段活用と呼びます。

ほかにもあるかな? 長崎方言でこの仲間を挙げてみよう

左に示した 1 ページ目「方言に生き残ったことば 1」では、形容詞連用形のウ音便の例、主格の助詞ノを使った長崎方言の例文を作成し、それぞれ枕草子の本文にも出ていることを確認した。また方言の助詞バは、竹取物語などに出てくる「をば」が語源となっていることを伝え、共に対象格の意味を持つことを確認した。

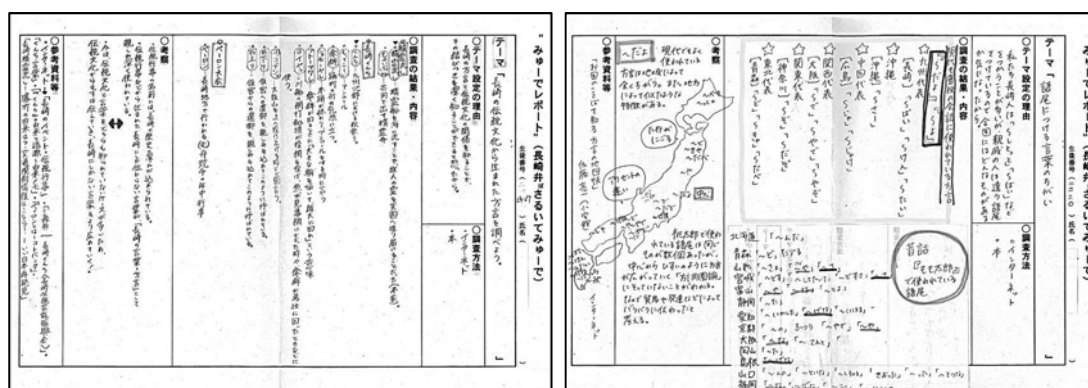
次に、2 ページ目では打ち消しの方言の助動詞ンが中世語ヌに由来すること、方言形ゴタツとバイはそれぞれ中世語ゴトシとワイに由来することを紹介した。

3 ページ目では動詞活用形に関する説明をした。長崎方言では入ルル、見ユル、寝(ぬ)ルと活用するが、表は古典文法の二段活用とほぼ同様のパターンであることを説明したものである。中学二年生ではすでに動詞活用表を学習しているので、活用表の形で説明をした。表中、

終止形は学校文法（古典）では「る」であるが、中世の文法という口頭の説明で、長崎方言と同様であることを言い添えた。

2-4 授業後のレポート

授業③での発表内容は後日、北村の指導でレポートにまとめ、提出を求めた。レポートは、準備した書籍類やインターネット、身近な方言話者へのアンケートなど、様々な方法を使って、各人が持ったテーマで作成されていた。内容は、長崎方言を中心に、他地域との語彙の違い、世代間の違いといったテーマが目立った。また、中には方言圏論を特定の語から検証する、という意欲作もあった。



「長崎の伝統文化から生まれた方言を調べよう」

「語尾につける言葉のちがいを」

長崎大学附属中学校2年生のレポートより抜粋

3. 取組の結果、考察

3-1 生徒へのアンケート

以上の授業を終了して、生徒の反応を確認するため、1クラスに自由記述のアンケートをとった。次頁の結果から、生徒が最も関心を持った内容は「方言圏論」であったことが分かる。方言が中央から同心円を描くように外側の地域に伝わっていくという理論は分かりやすく、授業中の生徒の反響が大きかった箇所である。次に関心を持ったものとしては、初めて聞く長崎方言である。特に「ずっきゃんきゃん」「ドワッシェン」「バンコ」などは音韻的にも特徴的で、印象に残ったようである。「方言史」に関しては、授業③の最後に関連する古語と対照する形で方言形を紹介した。特に、活用形などの文法的事項が多かったので、最も気を遣った内容であったが、予想以上に興味を持ったようである。

「質問 2」は、レポート作成で参考にした内容を問うたものである。ここでも方言圏論について、自分でも調べてみようという姿勢が窺われた。方言史に関する回答が 1 人しかいないのは、古語との関連を説明する以前だからであろう。「質問 1」で方言史に触れた生徒が 9 人もいることを考えると、授業で古典語との関連を説明したことが、生徒の興味に繋がったことを裏付けている。「質問 3」の今後調べたいことには様々な方面から方言に関心を持った様子が現れていた。

質問1 授業で印象に残っていること、興味深かったことは何ですか？

| | |
|---------|--|
| 方言地理的な面 | 20人（方言圏論…16人、地域による差…4人） |
| 方言史の面 | 9人（方言の由来、古語との関連について…3、方言が消えていく事実…3、方言と歴史の関係について…3） |
| 俚言の由来 | 16人（ズッキャンキャン、ドワッシェン等の俚言…13、おくんちやオランダが影響した方言…3） |
| 方言使用実態 | 9人（長崎方言アンケート結果…1、方言の年齢差…2、言の若者言葉の存在…1、気づかない方言…5） |

質問2 「みゅーでレポート」作成の中で参考にした点はどういうことですか？

| | |
|---------|---|
| 方言地理的な面 | 15人（方言圏論…7、近隣でも差があること…8） |
| 方言史の面 | 1人（方言には中央語の残存があること…1） |
| 実態の紹介 | 5人（使用の世代差…2、自分が知らない方言…1、方言のいろいろな特徴…1、気づかない方言…1） |
| 研究方法 | 7人（地域による違いの表し方…1、周囲の人が使っているかという視点…1、教材のテーマ例…1、論の述べ方…1、研究方法…3） |
| 諸情報 | 4人（祖母の話、web情報…1、方言CD…1、本…1、九州の方言…1） |

質問3 今後調べてみたいことや、聞いてみたいことは何ですか？

| | |
|--------|---|
| 他地域の方言 | 14人（他県の方言…7、他言語の方言…4、方言の全国分布…3） |
| 方言史の面 | 6人（方言形の誕生…2、言語の変化を年表にしたい…1、方言になるまでの過程…1、方言の今と昔の違い…1、外来語の由来…1） |
| 方言地理 | 5人（方言の広がり方…2、圏分布・逆圏論について…3、方言の多い所はどこか…1） |
| 長崎弁実態 | 5人（実際に人に方言を聞きたい…1、長崎弁を使う人の割合…1、若者ことばと方言の関係…1、年齢別方言の違い…1、若者の中に方言の強い人がいるのか…1） |
| 俚言 | 4人（他の方言語彙…2、消滅した方言…2） |
| 理論的なこと | 1人（方言の存在意義…1） |
| 共通語 | 2人（中央語成立のしくみ…1、標準語はどこ言葉か…1） |
| その他 | 3人（方言が使われない現状で必要なこと…1、よそから見た長崎弁の印象…1、声優の方言について…1） |

3-2 授業内容の反省

身近な地域のことばが話題であることもあり、どの生徒も授業に積極的に参加

し、発言も活発であった。方言と気づいていなかった語や、初めて聞く方言形にもよく反応し、興味を持ってくれたようである。

今回、文法学習を始めたばかりの中学年生へ、古典文法への橋渡しという意味で方言の文法的面を紹介した。準備段階では中学生には難しいのではないかとこの危惧が有ったが、関心を持った生徒が予想以上に多かった。二段活用動詞の説明においても、活用表を修得して間もないこともあり、理解できる生徒は少ないのではないかと考え、敢えて簡略な説明にとどめたが、嬉しい誤算であった。

アンケートの回答からも積極的に学ぶ姿勢が窺え、今回の取り組みは、中学2年生に対して一定の成果を上げたのではないかと考える。

おわりに

本研究の目標は、方言学習を通じて郷土愛を育み、郷土の歴史と古典学習に繋げることである。実践を通じて、附属中学の生徒がことばの広がりや歴史について考え、自ら知ろうとする姿勢に、手応えを感じた。今後は、更にさらに教材にバリエーションを加え、長崎県下の中学校にも情報提供をしていきたいと考えている。

最後になりましたが、多忙な時間を割いて全面的にご協力いただいた、長崎大学教育学部附属中学校の先生方に感謝申し上げます。

注

1 アンケート協力者の内訳

女性 89 歳、女性 73 歳、男性 71 歳（以上、長崎市在住）

女性 70 代、男性 70 代、女性 40 代、男性 40 代（以上、北松浦郡佐々町）

2 附属中学校に設置した資料は以下の方言書と長崎出身の作家による方言小説 7 冊である。

柴田武 1958『日本の方言』岩波新書／藤本義一 1990『方言と共通語』河出書房新書／原田章之進 1993『長崎県方言辞典』風間書房／佐藤亮一 1995『九州地方（郷土の研究方言をしらべよう）』福武書店／平山輝男 1998『長崎県のことば』明治書院／真田信治 2002『方言の日本地図-ことばの旅』講談社／佐藤亮一 2002『方言の地図帳』小学館／佐藤亮一 2003『日本方言辞典-標準語引き』小学館／小林隆 2006『方言が明かす日本語の歴史』岩波書店／九州方言研究会編 2009『これが九州方言の底力!』大修館書店／佐藤亮一 2009『都道府県別 全国方言辞典』三省堂／井上史雄 2009『方言と地図』フレーベル館／篠崎晃一 2011『出身地(イナカ)がわかる方言 (幻冬舎文庫)』毎日新聞社／篠崎晃一 2013『えっ?これって方言なの!~マンガで気づく日本人でも知らない日本語~』主婦の友社／佐藤亮一 2015『滅びゆく日本の方言』新日本出版社／井上史雄 2016『はじめて学ぶ方言学』ミネルヴァ書房

* 本研究は平成 28 年度研究企画推進委員会プロジェクトの助成を受けています。